養　　護

第75号

2024年3月

秋田県養護教諭研究会

担当　男鹿潟上南秋支部

男鹿潟上南秋支部だより

男鹿潟上南秋支部は、男鹿市、潟上市、南秋田郡(井川町、五城目町、八郎潟町、大潟村)の３地区からなり、学校数28校、会員は29名です。校種別の内訳は、小学校15名、中学校７名、義務教育学校１名、高等学校４名、特別支援学校２名です。平成30年度に男鹿支部と潟上・南秋支部が合併して一つの支部になりました。

本支部も全県的な傾向と同様に小・中・高等学校等の統廃合計画が進められ、会員数が減少していますが、今後もさらなる統廃合が予定されております。そこで今年度の総会では、組織運営の見直しを提案、協議し、運営委員主導の体制から『一人一役』の新体制への移行が承認され始動したところです。今後の会員減少や世代交代を見据え、全員が役に携わることにより、組織を運営する上で困ることのないようにというねらいもあります。初年度は役割分担・目標を明確にし、組織全体で活動に当たり、年度末までに新体制の成果と課題について調査を実施し、ＰＤＣＡサイクルで次年度の活動へ繋げていく予定です。養護教諭同士の繋がりを意識した体制づくりを進め、運営のスムーズな移行のためにできることを実際に動きながら会員と共に考えていきたいと思います。

さて、今年度の本支部の研究テーマは「児童生徒の健やかな心と体を育むために～これからの養護教諭の職務と役割を考える～」とし、年２回の研修を計画しました。その内容は、児童生徒の健康課題解決や養護教諭の執務上の課題解決に関するものとし、自校の執務にすぐに生かすことができるよう研修を積み重ねています。

９月に開催した１回目の研修会は、子どもたちの健康課題の一つである「メディアとの付き合い方について～養護教諭としてできること～」をテーマに、秋田県生涯学習センター　副主幹(兼)学習事業班長　柏木　睦氏による講話や潟上地区の実践発表があり、さらに地区毎、校種毎に情報交換を行い、充実した研修会となりました。この研修会は３地区が順番に共同研究の発表をしており、令和３～５年度の発表を次ページから掲載しています。

10月に実施した２回目の研修会は、養護教諭の資質向上に関する研修です。学校保健総合管理「えがお」や今年度から県立学校でスタートしている校務支援システム等普段からＩＣＴは活用されていますが、より効果的・効率的に活用するための実技研修を企画しました。前半ではタブレットを使用しながら調査票作成の仕方を学び、後半では作成した調査票のＱＲコードを読み取り、入力、送信し、瞬時に集計できることを実感できる内容にしました。初めての試みですが研修の振り返りを全体で行い、学んでみたい、あるいは学ぶべき内容を精選し、次年度の研修に繋げていきたいと思っています。

令和２年からのコロナ禍で加速した、児童生徒向け１人１台端末と高速大容量通信のネットワーク整備による『ＧＩＧＡスクール構想』の現場にいる私たち養護教諭にも意識改革が求められています。ＩＣＴの活用については、執務における資質能力の向上のため、また働き方改革の一環としても積極的な活用が求められています。コロナ禍を経て、今までの常識を超えることに誰もができることから対応してきました。その経験を活かし、ＩＣＴをはじめ新たなことを受け入れ、実現可能な手段や方向性を見い出す、仲間と一緒に触れてみる等、個としても支部としてもブラッシュアップできる活動を今後も支部会員とともに考えていきたいと思っています。

こうした資質向上のための歩みは、児童生徒の健康・安心・安全を守っていくことに繋がると信じて進んでいきたいと思います。そのためには、私たち自身が心身共に健康であることにプラスして、養護教諭同士という横の繋がり、経験値という縦の繋がりが折り重なった丈夫で安心できるネットワークという地盤が重要です。これまで地盤を固め、繋いでくださった先輩方や心強い御支援をくださっている各関係機関への感謝を忘れず、日々を積み重ねて本支部の歩みを繋いでいきたいと思います。

(支部長　加藤　真理子)

ブロック共同研究

私たちの考える理想の保健室環境

男鹿潟上南秋教育研究会養護教諭部会男鹿地区

１　はじめに

「学校保健安全法　第７条（保健室）　学校には、健康診断、健康相談、保健指導、救急処置その他の保健に関する措置を行うため、保健室を設けるものとする。」と定められているが、県内の新設校や市内各校の保健室の状況調査から、私たち養護教諭は、実に様々な条件下で執務をこなしていることが分かり、「全て統一された保健室はない」という結論に至った。

そこで、私たちは、理想の保健室環境を考え具体化し、救急機能の統一について提案する。

２　実践内容

デザインコンペティションの様子

(1) 保健室デザインコンペティション

保健室の状況調査を基に、これからの保健室経営に望まれる保健室の施設・設備について現状と課題を整理し、私たちの考える理想の保健室環境を創出するために、様々なアイデアを出し合い、話し合った。

(2) 各チームの取組

①　見取り図チーム

コンペで出し合った意見を基に、保健室内を機能別(救急機能・外来機能・相談機能)にエリア分けし、それを取り入れた「理想の保健室」の図面を作成、男鹿モデルとして提案した。

②　「応急処置カート」チーム

「応急処置カート」は、「衛生材料・外傷・備品等」の３つにゾーニングした。３つのエリアには、想定されるけが等の状況にすぐ対処できるよう、薬品や衛生材料等を完備し、更にリストを「応急処置カートの薬品等一覧」としてカートに備え付けた。

③　保健室アルバム

男鹿市内の全小中学校10校(うち１校は、令和３年度に閉校)の保健室の現状(施設・設備・備品)を把握し、「保健室アルバム」として保存することを目的として状況調査を行った。各校それぞれが独自の構造や設備を備えており、「各校の保健室の現状(客観的視点)」と「執務を行う養護教諭として感じ、考えていること(主観的視点)」も併せて、資料としてまとめた。

(3) 「応急処置カート」の統一

理想の保健室環境を話し合い、具体化することで分かったことは、各学校の環境の違いと養護教諭の個性が加わることにより、「全て統一することは難しい」ということである。そこで、保健室の役割の一つである救急処置で使用する「応急処置カート」の男鹿モデルとして統一を図り、各校で実践した。

応急処置カート

３　研究の成果と課題

理想の保健室環境を皆で考えを出し合い、話合いができたことが何よりの成果であった。さらに、「応急処置カート」の統一を図ることができた。市内各校の保健室で「応急処置カート」を標準仕様(スタンダード)にすることで、養護教諭だけでなく、教職員全てがどこの学校へ異動しても、迷わず素早く応急手当ができるという利点がある。今後は、改善点等について話し合い、さらに執務向上に繋がる「応急処置カート」を目指し、研究を進めたい。また、教職員への周知徹底についても再検討が必要となるであろう。今後の課題としたい。

４　おわりに

養護教諭や保健室に求められる役割が多様化・複雑化し続けている中、私たち養護教諭は、様々な条件下で執務をこなしている。このたびの研究では、理想の保健室環境を目指して、一人一人が理想を語り、話し合い、実践を共有できた。今後も養護教諭同士の繋がりを大切にしながら、日々の実践を積み重ねていきたい。

（文責：船越小学校　柏木明香、男鹿南中学校　加賀谷珠理）

ブロック共同研究

メディアとの上手な付き合い方～養護教諭としてできること～

男鹿潟上南秋教育研究会養護教諭部会潟上地区

１　はじめに

子どもたちのメディア機器の使い方による生活習慣の乱れが問題視されるようになり、天王南中学区（追分小・出戸小・天王南中）においても、日々の児童生徒の様子から危機感をもっていた。昨年度から児童生徒のメディア機器の使い方について三校連携で取り組むことになり、私たち養護教諭も健康教育の機会を得た。取り組み始めたばかりであるが、本学区の実践の一部を紹介したい。

２　実践内容

(1) 令和４年度の取組

① アウトメディアチャレンジ週間（12月12～16日）
　○対象…本学区の児童生徒と家族
　○方法…４つのコースから選択、３日間チャレンジ
　・保健だよりや三校連携だよりでの周知
　・ネット安全教室や委員会活動（全校集会）での呼びかけ

② 実態把握と情報発信
　・チャレンジカードの集計、保健だよりで感想等の紹介

研修会講話のガヤガヤタイム（話合い）

(2) 令和５年度の取組（予定を含む）

① 最新情報を学ぶ場の設定
　・支部会員全員へのアンケート調査
　・講師の選定、講話の依頼（９月の研修会に講話を設定）
　　「子どもたちのゲーム・ネットとの付き合い方について考えよう！」
　　秋田県生涯学習センター　副主幹（兼）学習事業班長　柏木　睦　氏
　・メディア機器と健康に関する講習会の受講（本地区養護教諭３名、オンライン）
　　「子どもの健康とスマホ・ゲーム依存」日本学校保健会主催

② アウトメディアチャレンジ週間（９月11～15日、12月11～15日の年２回）
　○対象、方法、周知の仕方は昨年度とほぼ同様（中学校は５日間のチャレンジ）
　・図書室と保健室のコラボ企画「メディアと健康」コーナーの設置（７～９月）

③ 家庭の協力を得るための手立て（予定）
　・チャレンジカードの集計と分析、保健だより等で感想や課題を情報発信
　・学校保健委員会での話題提供、三校連携だより等で今後の方向性を提案

３　成果と課題

実施後の感想から、多くの保護者がアウトメディアの必要性を感じていること、小中連携で取り組むことに賛同する意見が多いことが分かり、継続する意義を見い出すことができた。アンケート調査や９月の研修からは他校の取組や最新情報等を知ることができたため、今後の指導に取り入れていきたい。

一方、中学校では前向きに取り組むことができない生徒が目立ち、指導の難しさを感じている。柏木先生の講話にもあったように大人も一緒にアウトメディアにチャレンジする姿を見せるなど、横並びの関係性で取り組めるように働きかけ、生徒の意識改革をしていくことが課題である。

４　おわりに

私たち養護教諭は、三校連携の「育ち部会」（主に生徒指導部や保健指導部で構成）で「アウトメディア」から「メディアコントロール」への言葉の変更を提案しようとしていた。しかし、話合いの中で、ＩＣＴ化が進む今だからこそメディアを意図的に絶つ時間があってもよいのではないかという考えに変わった。児童生徒にメディア機器と上手に付き合い、生活時間をコントロールする力を身に付けさせたいという思いを軸に、養護教諭としてできることを今後も考え続けていきたい。

（文責：天王南中学校　小栗道子、追分小学校　藤田由香、出戸小学校　佐々木花菜子）

ブロック共同研究

コロナ禍の学校で、感染症対策を行うための校内体制づくり
～信頼される養護教諭を目指して～

男鹿潟上南秋教育研究会養護教諭部会南秋地区

１　はじめに

新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴い、学校ではこれまで経験がない感染症対策を求められることになった。その中で養護教諭は保健主事と共に学校保健活動の中核を担い、感染症対策に取り組むことになり、様々な課題に直面し、そのたびに工夫を重ね、校内職員と協力し合いながら今日まで対応に当たってきた。その対応策は全ての学校が同じではなく、各市町村や各校の実態によって違うことが分かったため、各校の実践について情報交換することが互いの学びとなり、自校の取組に生かせるのではないかと考えた。そこで支部全体の共通の課題と解決の手立てを探ることに取り組んだ。

２　実践内容

(1) 新型コロナウイルス感染症対策についてアンケート調査を実施

① 実施日：令和３年１月７日～22日

② 対　象：男鹿潟上南秋地区小・中・義務教育学校の養護教諭25名　回答率100％

③ 内　容：各校の取組状況と課題

(2) 男鹿潟上南秋教育研究会養護教諭部会研修会で報告　令和３年９月

研修会で報告

① 困難だったこと
必要物品の確保、健康診断を実施するための予防対策

② 対策が不十分だったと感じること
登校後の体調不良者への対応と隔離、児童生徒への保健教育

③ 負担だったこと
校内の環境整備・消毒活動、登校時の健康観察の徹底、感染症対策計画と校内体制づくり

④ 解決の手立てや工夫したこと
・教育委員会が各校に物品を支給、検診前に学校医・学校歯科医と打合せ、換気・マスクの着用・３密の回避
・保健室のゾーニング、児童保健委員会・集会で指導
・県や市町村事業を活用、日常の清掃時間を活用、市で統一した健康チェックカードの活用

(3) 男鹿潟上南秋教育研究会養護教諭部会研修会 グループ協議　令和３年９月

① 全教職員と連携して感染症対策を行うための校内体制づくりについて

② 感染症対策の計画立案時の養護教諭の役割について

研修会でのグループ協議

３　成果と課題

(1) 成果
・他校の養護教諭の取組の工夫や実践を知り、自校の活動に取り入れることができた。
・新たな課題を共有し、解決に向けた工夫や改善策について協議することができた。
・前例のない感染症対策に対する不安や悩みを協議の中で共感でき、各校の実践共有が課題解決の一つの方法になることに養護教諭自身が気付いた。

(2) 課題
・養護教諭が保健主事を兼務している場合、保健衛生に関して養護教諭一人の考えや行動と捉えられないように管理職から職員への声掛けがあると動きやすい。
・臨時休校や学校行事の縮小・削減など、教育活動が制限されたことによる児童生徒の心への影響については、今後も注視していかなければならない。家庭の経済的困難など、児童生徒を取り巻く環境の変化を想定しながら、日々対応していきたい。

４　おわりに

新型コロナウイルス感染症は５類へ移行後も、いまだに収束の兆しが見えない状況である。毎日の感染症対策に困ったり悩んだりしながらも実践し続けたことに誇りをもち、養護教諭同士の情報共有や校内職員との連携を大切にし、子どもたちの健康を守り、信頼される養護教諭を目指したい。

（文責：脇本第一小学校　小玉真紀子、大潟中学校　田中あき子）

ブロック共同研究

新型コロナウイルス感染症の対応を振り返って

男鹿潟上南秋養護教諭部会県立学校

１　はじめに

本ブロックは高等学校４校、特別支援学校１校で構成されている。

令和２年から新型コロナウイルス感染症が流行し、新しい共通の危機的課題に直面した。基本的対策は示されても、現場である学校においては、その対応策は同じではない。そこで、令和２～５年４月までの取組の中で各校に共通する環境整備・情報発信について紹介したい。

２　主な実施内容

(1) 感染予防のための環境整備

①　サーマルカメラの設置…学校内に入る前に検温ができるよう生徒昇降口と職員玄関に設置。

②　タッチレス製品の設置…手洗い場の非接触蛇口。足踏み式消毒ポンプや自動手指消毒器、非接触式体温計の購入。

③　換気の効率化…送風機の活用(体育館に大型送風機、教室に扇風機やサーキュレーターの設置)。

〈ゾーニングした休養スペース〉

④　ＣＯ₂モニターの設置…各教室、特別教室、職員室に設置。

⑤　ゾーニング…別室、ビニールカーテンで保健室を仕切った休養スペースの設置。

(2) 保健だよりでの情報発信

新型コロナウイルス感染症への対応が日々変化していたため、そのたびに新たな情報や改めて伝えたい感染症対策・基本的生活習慣の大切さについて情報発信を行った。また、新型コロナウイルス感染症に関する誹謗・中傷等が起こらないように、定期的に保健だよりで取り上げたり、秋田県の相談窓口資料を配付したりした。保健だよりで取り上げた内容は保健室前にも掲示した。

(3) 学校三師との連携

「学校の新しい生活様式」に基づき、学校教育活動の留意点や消毒方法などについて、学校三師と連携しながら対応した。具体的に学校薬剤師からは、環境衛生検査における二酸化炭素濃度検査の結果と照らし合わせ、教室等における対角線の窓を10ｃｍ以上常時開放するなどの効果的な換気方法について指導を受けた。

(4) 研修会・情報交換会

高等学校養護教諭部会を年２回(夏季・冬季休業中)開催した。新型コロナウイルス感染症の対策や実践について情報交換・協議を行い、自校での取組の改善に繋げた。

３　成果と課題

(1) 成果

様々な環境整備により、児童生徒同士の接触を減らし、感染拡大防止に努めることができた。各校の環境整備のアイディアは参考になることが多く、情報交換の重要性を改めて感じた。また、情報発信を行い、児童生徒・教職員の意識を高め、適切かつスムーズに対応することができた。新型コロナウイルス感染症の感染不安による差別・偏見抑止についても養護教諭が率先して指導し、児童生徒の心身の健康を守ることができた。学校医等から最新の情報を得ることで、的確な感染症対策を行うことができた。

(2) 課題

新型コロナウイルス感染症予防への理解が浸透する反面、行動変容までに至らず、一部の生徒から感染症予防への協力が得られないケースがあった。児童生徒が感染症対策について自分たちで考え行動できるようになるため、継続的な全体指導と個に合わせた指導を充実させていきたい。また、養護教諭の特性を生かしたコーディネート力を発揮できるよう、日頃から教職員や保護者、関係機関、地域と連携を深めるよう努めたい。

４　おわりに

新型コロナウイルス感染症対策を通して、各校で様々な取組を行ってきた。各校養護教諭からの感染症対応に関する情報に大変助けられた。これからも横の繋がりを大切にしながら、共通の健康課題解決に向けて協力していきたい。

（文責：秋田県立男鹿工業高等学校　佐藤美沙都、秋田県立支援学校天王みどり学園　徳重喬子）

祝　受　賞

◇秋田県学校保健功労者表彰

※御写真左側より

吉　尾　美奈子　先生
（秋田市立勝平中学校）

千　葉　奏　子　先生
（美郷町立美郷中学校）

岩　野　幹　子　先生
（秋田市立城南中学校）

淡　路　優　子　先生
（秋田市立東小学校）

皆様の益々の御活躍を祈念申し上げます

令和５年度 新規採用養護教諭紹介　今年度11名が仲間入りしました

長谷部　愛　佳	大館市立山瀬小学校
小　柳　奈　都	三種町立金岡小学校
藤　原　莉夏子	秋田市立大住小学校
古　井　佑　佳	由利本荘市立岩城小学校
福　土　育　美	湯沢市立皆瀬小学校
沢　田　操　紀	小坂町立小坂中学校
嶋　崎　史　佳	北秋田市立合川中学校
高　橋　碧　美	三種町立山本中学校
佐々木　愛　弓	由利本荘市立由利中学校
大　沼　う　い	大仙市立協和中学校
大　高　彩都子	県立湯沢高等学校

新規採用者研修にて

県養護教諭研究会評議員（支部長）

鹿角	中　村　千　秋	小坂小学校
大館北秋田	小　畑　明　子	早口小学校
能代・山本	金　子　麻　子	二ツ井小学校
男鹿潟上南秋	加　藤　真理子	五城目小学校
秋田	山　田　由美子	山王中学校
本荘由利	佐々木　千　春	本荘北中学校
大曲・仙北	宮　野　祐　子	角館小学校
横手	宮　本　智　子	横手明峰中学校
湯沢・雄勝	山　中　奈緒子	湯沢北中学校

県高等学校連絡会代表者

代表	工　藤　結　子	秋田工業高等学校
世話人	佐々木　奈緒子	本荘高等学校(定時制)
鹿角	木　村　晶　子	小坂高等学校
大館北秋田	鷹　觜　聡　子	秋田北鷹高等学校
能代・山本	三　浦　百合子	能代科学技術高等学校
男鹿潟上南秋	加　藤　俊　子	秋田西高等学校
秋田	加　藤　奈　穂	秋田市立秋田商業高等学校
本荘由利	黒　木　仁　美	矢島高等学校
大曲・仙北	細　井　渉　夢	六郷高等学校
横手	草　薙　裕　子	横手清陵学院高等学校
湯沢・雄勝	栗　谷　幸　子	湯沢翔北高等学校雄勝校

県養護教諭研究会役員

顧　問	佐　藤　素　子	秋大附属小学校
会　長	渡　部　有紀子	金足農業高等学校
副会長	小野寺　裕　子	城東中学校
副会長	工　藤　結　子	秋田工業高等学校
幹　事	髙　橋　雅　子	大住小学校
会　計	横　山　みな美	飯島南小学校
	幸野谷　ひろみ	秋大附属幼稚園
理事長	黒　木　仁　美	矢島高等学校
理　事	佐々木　奈緒子	本荘高等学校(定時制)
理　事	佐々木　あゆみ	ゆり支援学校
理　事	杉　山　詩　乃	明徳小学校
監　事	佐々木　美穂子	北陽小学校
監　事	真　壁　美和子	男鹿東中学校

編　集　後　記

令和５年７月の大雨で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。今年度、男鹿潟上南秋教育研究会養護教諭部会各地区の実践を無事掲載することができました。編集に携わっていただいた皆様に感謝いたします。

今回の実践を通して感じたことは、はじめはバラバラだったベクトルが、同じ目標に向かい１つになったときの一体感と充実感でした。理想を語り、話し合うことで得ることができた体験でした。

社会の変化が激しく、将来を予測することが困難な時代において、今後も「どんな子どもに育ってほしいのか」という願いを共有し、そのために「養護教諭として何ができるのか」を話し合い、同じ目標に向かって取り組むことを大切にしていきたいと思います。　（柏木明香）